

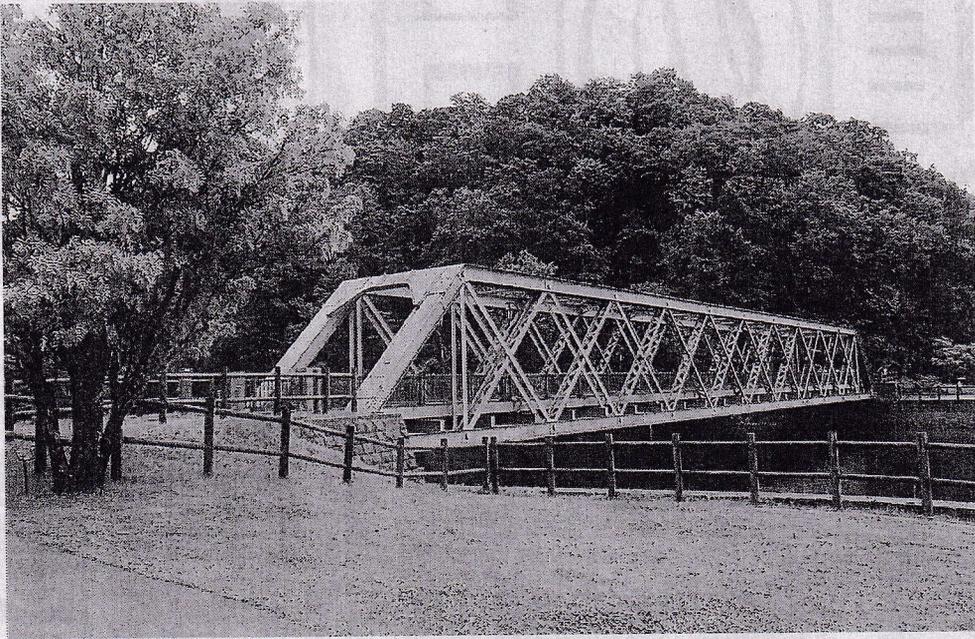
支笏湖日記

支笏湖の湖畔に、千歳川を渡る「山線鉄橋」と呼ばれる橋が架かっていることは、多くの方がご存じのことだと思います。現在の橋は1997（平成9）年に修復されたものですが、歴史をさかのぼると1908（明治41）～51（昭和26）年、苫小牧の王子製紙と支笏湖畔、さらには千歳川沿いの王子製紙第4発電所（千歳市水明郷）まで延長約40キロを結び「山線」の愛称で親しまれた王子軽便鉄道に使われていたものです。

この橋は、道内に現存する最古の鉄橋で、千歳市の

自然に溶け込む「山線鉄橋」

地域と人々の歴史語る



支笏湖の歴史を見守ってきた山線鉄橋

有形文化財に指定されています。今では鉄橋の朱色が周りの景観にも溶け込み、支笏湖の名所の一つとなっています。

当時、この「山線」には

全長8.5キロ、軌道幅76センチほどの小さな蒸気機関車が、物資や木材のほか、苫小牧と支笏湖を往来する人々を運ぶため活躍していました。

苫小牧と支笏湖双方の発展

に寄与するとともに、その歴史を見守ってきた「山線」は、製紙業の歩みを物語る遺産として「山線鉄橋」と共に国の近代化産業遺産に登録され、蒸気機関車は山

線出発点の苫小牧市内に大切に保存されています。

一方、現在の支笏湖は、札幌や空港からの好立地も相まって日帰りや小樽、登別などと組み合わせた通過点としての利用客が多数を占めているのが現状ですが、他の観光地では味わえない支笏湖の魅力を感じてほしいと思います。

豊かな自然に触れ、さまざまなアクティビティーを体験し、さらには地域と人々の悠久の歴史を知る。支笏湖で時を過ごすことから生まれる豊かな旅。そんなくつろぎを体感するのに、支笏湖発展の礎となった「山線」はうつつの素材ではないかと考えています。

当時活躍した蒸気機関車14面のうち3両は、北海道のものづくりの原動力である小樽で造られたことが分かりました。何とか蒸気機関車を復元し「山線鉄橋」の傍らに展示することができれば、山線の歴史と北海道産業史の一端を知る貴重な資料になるのではないのでしょうか。

（自然公園財団支笏湖支部 所長 木下宏）